『方丈記』諸本の再調査

――延徳本・最簡略本――

神田邦彦

要旨

『方丈記』の諸本については、古本・流布本・略本の関係が長く論争になっているが、一方で、そうした問題を考えるうえで重要な、伝本のまとまった調査・研究は、鈴木知太郎・簗瀬一雄・青木伶子・草部了円ら以来、三十年以上行われていない。この三十年の間には、新たに出現した伝本もあるであろうし、所蔵者が変わったものもあるであろう。そこで、『方丈記』諸本の再調査を略本から進めているが、本稿では三系統ある略本のうち、延徳本系統・最簡略本系統について調査したところをまとめる。

延徳本・最簡略本については、関東大震災で焼失したものや、現在行方不明のものが多いことがわかったが、幸いそれらの影写本が豊富に残されていることも明らかになった。そこで本稿では、研究史を概観しながら、各伝本の解題を記し、影写本については、影写本相互の異同を整理して、散佚した伝本の原態を探る。

これまでの略本研究では、諸本間の異同が顧みられることは少なかった。しかし、本文異同の比較・対照に始まる本文の校訂作業は、研究に不可欠のものである。本稿では、そうした略本研究における問題点にも言及して、今後の研究に向けた階梯とする。

はじめに

『方丈記』の諸本は、広本と略本に大別され、広本は古本と流布本の二系統に、略本は長享本・延徳本・最簡略本の三系統に分類される。[1] これら各系統相互の関係については、古本が長明の原本をもっとも忠実に伝えるもので、流布本はこれに後人の手が加わったものであり、略本はこれをもとに改作したものとする見方と、略本は草稿であり、流布本はその改訂稿、古本は最終稿とする見方とがあるが、決着していない。[2] 簗瀬一雄は、「こうした問題は、何回でも根本に立ちもどって研究すべき」だと述べているが、[3] 流布本・略本は後人の手が加わったものなのか、それともそこに長明の推敲の跡を追えるのかは、『方丈記』の根本を揺るがす問題であるといえるから、筆者も今後さらなる追及が俟たれる課題であると推察する。

ところで、こうした諸本の問題に取り組む上で欠かせないのが諸本の調査であろうが、それは鈴木知太郎（「方丈記諸本解説略」、のちに「方丈記諸本解説」に改稿。以下引用文献の書誌は一覧を本稿末尾に記す）・簗瀬一雄（「方丈記伝本考」）・青木伶子（『広本略本方丈記総索引』）・草部了円（『方丈記諸本の本文校訂に関する研究』）ら以来ほとんど行われていない。簗瀬の「方丈記伝本考」の改訂版が出た一九八〇年を最後に、まとまった調査は公表されていないから、それから三十年余が経つことになる。昨年、三角洋一氏が「『方丈記』古本系諸本の関係」において、冷泉家時雨亭文庫本と細川幽斎自筆本とを含めた検討を行い、古本系主要諸本の関係を明らかにされたが、冷泉家本は二〇〇九年に公開されたものであるし、[4] 幽斎筆本は一九八四年に影印が刊行されていて、[5] こんにちまで検討が置き去りにされていたものである。本稿で述べるところの延徳本・最簡略本については後述するが、この三十年の間には、

このように公開されながら検討されずにある『方丈記』の伝本はかなりの数にのぼる（拙稿b）。したがって、『方丈記』の諸本は、再調査、再検討がなされていい時期に来ているのではないかと推察する。

そこで、筆者は二〇一一、二〇一二年度に行われた国文学研究資料館の共同研究「大福光寺本「方丈記」を中心とした鴨長明作品の文献学的研究」に参加させていただいたのを契機に、もっとも調査が行き届いていなかった略本から調査を行い、略本の三系統のうち、長享本系統の伝本七本について別稿にまとめた（拙稿a・c）。本稿はそれに続くもので、同じく略本系統に属する延徳本系統と最簡略本系統の伝本について、調査したところを記すものである。

一、延徳本系統の諸本

延徳本は、奥書に、「此本奥書曰、方丈記者是祇翁之所持、以長明自筆巻物写之畢、誠筐中之重宝也／延徳二年三月上旬　肖柏判」と見えて、宗祇（祇翁）が所持していた鴨長明自筆本を、延徳二年（一四九〇）三月に肖柏が写した由を伝えていることからその名称があるが、本文の主な異同としては、他の略本に見えない所謂「折琴・つぎ琵琶の条」があり、末尾に、「桑門蓮胤誌之」との長明の署名（蓮胤は長明の法名）のあることが特徴である。

因みに、近年まで延徳本の特徴として、右の署名のあとに、「墨染の衣に似たる心かと問人あらはいかゝこたへん」という和歌が一首記されていることが知られていたが、加賀元子氏が紹介された最簡略本系統の豊山文庫本（後述）にもこの歌があって、延徳本のみの特徴とはいえなくなった。

このたびの調査では、次の（1）～（3）の三本を確認した。

（1）東大国語研究室本（東大本と略称）

東京帝国大学国語研究室にあった写本一冊で、松浦貞俊の『方丈記五種』解説によると、原本は関東大震災で焼失した（二九頁）ということであるが、菅野真梁の「異本方丈記研究小史」によると、

異本方丈記を初めて世に紹介せられたのは、故藤岡作太郎博士であつた。それは、東京帝国大学文科大学に於いて、明治三十九年九月より博士の逝去の時に至るまで約三箇年半に亘れる講義「鎌倉室町時代文学史」第二年（明治四十九（マヽ）年より）の初頭に於てなされたものである。

（中略）この藤岡博士のあげられた「延徳二年宗祇の手書を写せるもの」とは、当時、東京帝国大学国語研究室に蔵せられてゐた延徳本で、後に東大本とか、国語研究室本とかよばれたものである。

しばらくして、書物ではないが、雑誌「心の花」には、この東大本が覆刻せられた。（二七四頁）

との由で、藤岡作太郎が「鎌倉室町時代文学史」の講義で、はじめて『方丈記』に異本（略本）があることを紹介したのが、この延徳本系統の東大本であったということである。この藤岡の講義はのちに同じ題で刊行されているが、それには、

この書（注、『方丈記』）に広略の二本あり。広本は類従本、扶桑拾葉集本皆然り。諺解、首書、泗説等またこれによれり。略本は延徳二年宗祇の手書を写せるものなるよしを記せり。この両本のいづれが方丈記の原本なりや分明ならず。（一一四頁）

と説かれ、「延徳二年宗祇の手書を写せるものなるよしを記」しているから、確かに延徳本である。ここでは原本の詳細な書誌には言及していないが、国立国会図書館には明治四十年（一九〇七）五月に藤岡が写したものを、弥富浜雄が同年六月に転写した旨の奥書を有する略本方丈記の校合本一冊がある。奥書に底本・校本を明らかにしていない

が、本文を検するに東大本を底本とし、長享本系統に属する森本を対校したものと思われ、藤岡が東大本を紹介したのが、明治三十九年から三年間行われた講義の第二年ということであるから、ちょうど同じ年で、藤岡が講義のために控えていたものの写しかと推察される。

藤岡はそれからまもなく没する（明治四十一年、一九一〇）が、先に引いた菅野の説明によれば、雑誌「心の花」に、東大本の翻刻が掲載されたとある。執筆者名や巻号が記されていないが、岩松東雄の「異本方丈記」がそれで、「心の花」の第十八巻第五号に掲載されている。大正三年（一九一四）の発表で、同十二年（一九二三）の震災焼失前の翻刻としては管見唯一のものである。それには冒頭に簡単な解説があり、

方丈記に就きては学者の間に諸説あり。こゝに東京帝国大学文科大学国語研究室に異本方丈記一巻を蔵す。本文流布本の何分の一にして終末の歌も流布本とたがへり。辞句の間まま訝しき点なきにしもあらねど、採録して学者の参考に供す。（七三頁）

と、東大所蔵の本であると記されてあるが、延徳二年の奥書のことなど、詳細には触れていない。本文を見るに、確かに延徳本系統の本であるが、後述する東大本の影写本三本と比較してみると、次のようになる。

岩松「異本方丈記」の東大本翻刻

行く川の流は絶ずしてしかももとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、且きえ且結んで久しくとどまる事なし。世中にある人もすみかも又かくの如し。もろもろの里々に

東大本の影写本（長連恒本・山田孝雄本・橋本進吉本による。三本はこの部分異同なし）

行川のなかれは絶すしてしかももとの水にあらすよとみにうかふうたかたハかつきえかつむすんてひさしくとゝまることなし世の中にある人もすミかも又かくのことし

棟を並べ甍を争へるたときいやしき人の住ゐも、世世を経てつきせぬ物なれども、昔ありしは今は無し。或は去年栄えて今年亡ひ、或は昨日つくりてけふは焼けぬ。既に人これに同じ。姿も変らずふるまひも同じけれども、古へ見し人は百人か中に僅に一人二人残れり。（後略）

もろ〳〵の里々に棟をならへいらかをあらそへるたときいやしき人の住ゐも世々を経てつきせぬ物なれともむかしありしは今ハなし或は去年さかへてことしほろひあるひハきのふつくりてけふハやけぬ既に人これにおなしすかたもかはらすふるまひもおなしけれともいにしへ見し人ハ百人か中にわつかにわつかにひとりふたり残れり（後略）

（衍カ）

（傍線・傍注筆者）

後述の東大本の影写本と比較すると、岩松の翻刻は漢字を当てている箇所が多く、読みやすく校訂したものと察せられ、また影写本において「わつかにわつかに」となっている衍字と思しき部分（傍線部）も直してある。原本が失われた現在にあっては、原本の状態をなるべく正確に伝えるものが希望されるが、これはそれに向かないといえる。

因みに、前稿（拙稿a、八四・八五頁）にも記したが、翌大正四年に珍書同好会から『異本方丈記』と題して、略本の翻刻が刊行されており、東大本はその校本になっている（底本は長享本系統の森本）。しかし、すでに同稿に記したとおり、この珍書同好会版も適宜漢字をあてたもので、略本『方丈記』の流布に寄与したものとして研究史上重要なものといえようが、原態をそのまま伝えるものではないから、こんにちではほとんどその役目を終えているといってよい。

山岸徳平影写本について

以上が震災での原本焼失前の状況であるが、焼失後は、大正十三年の吉川秀雄『校定方丈記評釈』巻末附録に、東

大本と森本（長享本系統）の校訂本文と頭注が掲載されており、同書の序によれば、

巻末の二種の異本は、畏友山口剛氏の写本を借り得て写しておいたものを附録としたのである。（三頁）

とあって、山口剛の影写本のあったことがわかる。また、先述の『方丈記五種』には、長連恒による影写本の影印が収められ、松浦の簡単な解説が付されている。それによれば、

右の国語研究室本（注、東大本）は、大正震火災の折に焼失せる由であるが、幸に長連恒先生が忠実に影写せられた本があり、原本の面影をしのぶことが出来る。この影写本には

右異本方丈記一巻は東京帝国大学
文科大学国語研究室所蔵本を影
写したるものなり
明治四十四年十月廿八日　　長連恒

と識されている。本冊所収のものは、この影写本の縮刷影印である。（二九頁）

ということであるが、現在は山口・長両影写本の行方はわからない。また、細野哲雄校注の『方丈記』（日本古典全書）にも東大本の翻刻が全文収録されており、凡例によれば、「延徳本については東京大学国語研究室旧蔵本（原本は大正十二年の関東大震災で焼失）を影写された山岸徳平先生所持本を恩借してこれによ」ったという（七三頁）ことであるが、これを山岸の「方丈記、私の書写本」で確認すると、

東大国語研究室本は、明治四十四年十月下旬に、東洋大学教授の長連恒先生が影写せられた。それを東洋大学関係の故松浦貞俊氏が転写されたのを、昭和四年七月上旬に借覧して写しておいた。（二頁）

ということであるから、長の影写本を松浦が写したものを山岸が写したもので、原本から三度の転写を経たものであ

る。これはこのたびの調査で、現在実践女子大学附属図書館山岸徳平文庫に蔵することがわかった。次に書誌を記しておく。

東大本の山岸徳平影写本　実践女子大学附属図書館山岸徳平文庫蔵（3495）。袋綴、一冊。縦二七・四、横一九・五糎。渋表紙。四周双辺の題簽に「異本方丈記国語研究室本」と墨書し、表紙左肩に貼付。また表紙右上に「略本、国語研究室本（延徳本）」と打付書き。また表紙右下に「山岸文庫」の朱印。前と後ろに遊紙各一紙あり。第一丁は扉で、左端に「異本方丈記」と書き、裏は余白。内題はなく、第二丁表一行目より本文。一面八行にし、第十一丁表六行目にて本文を終え、次行に「墨そめの衣にゝたるこゝろかと／とふ人あらはいかゝこたへむ」と和歌を二行に書く。第十一丁裏は一行目下部に「桑門蓮胤誌之」と記し、次の行より延徳二年の奥書を記す（奥書の本文は省略）。次の一丁は余白で、墨付第十二丁表に以下の書写奥書がある。

右一巻異本方丈記東大文科大学国語研究室旧
蔵本也　大正大震災之日東大学舎尽皈于烏有而
典籍挙為灰燼矣　明治四十四年十月下浣
長氏書写斯巻僅止原型者也　余借覧斯巻
于松浦氏得閑一読遂令家中小女影写者也尓耳
昭和四年夷則（七月）九霖雨霽後夜
岸廼舎識

第十二丁の裏は山岸が見たと思しき『方丈記』の写本が列記されている（本文は省略）。なお、表紙・奥書は山岸筆。本文は別筆である。

橋本進吉影写本について

また、簗瀬一雄の『延徳本方丈記』（碧冲洞叢書第四十四輯）に、東大本の橋本進吉影写本の翻刻も掲載されている。その「解題」によると、

京都の鈴鹿三七氏は、大正三年（一九一四）に橋本進吉氏に依頼して作られた影写本を持つて居られる。

今、同氏の協力によつて、本叢書に収めたものは即ちこれである。奥に、

此の書は東京帝国大学文科大学国語研究室の蔵本なり文学士橋本進吉氏を煩して此の影写本を得たり

大正三年秋　　東陵生識

と認めてある。東陵は鈴鹿氏の号である。　　（一・二頁）

とあって、鈴鹿三七が橋本進吉に依頼して写させたものとの由である。これはこのたびの調査で愛媛大学附属図書館鈴鹿文庫に所蔵が確認された。前掲の簗瀬の「解題」では触れていないところもあるので、次に解題を記しておく。

橋本進吉影写本　愛媛大学附属図書館鈴鹿文庫蔵（1655）。一冊。登録書名「異本方丈記（延徳本）」。袋綴、縦二六・五、横一九・〇糎。肌色無地表紙。表紙左端の四周双辺の刷り題簽に「異本方丈記」と墨書（鈴鹿三七筆）。本文料紙は楮紙。第一丁表左端に「異本方丈記」と墨書。裏は余白。内題はなく、第二丁一行目より本文を始め、一面八行に書く。第十丁表六行目で本文を終え、次行に「墨そめの」の歌（前出）を二行に分かって書き、その裏に「桑門蓮胤誌之」と記して、次行から同丁末行にかけ延徳二年の奥書を記す（前掲参照）。次丁（第十一丁）表に、三七の筆で（本文別筆）、

此の書は東京帝国大学文科大学国語研究室の蔵本なり文学士橋本進吉氏を煩して此の影写本を得たり

大正三年秋　　東陵生識

と記し、一行余白を隔てて、また三七の筆で、

龍谷大学々生（塗抹）京都市辻猪熊東の小川寿一氏一本を蔵せらる徳川中期を遡らざる写本なり

昭和三年九月一見の節これを識す

巻首旧蔵者印次のごとし

と記し、「ごとし」の左に、紙片に朱筆をもって蔵書印を模写し、貼付してある（「松秀／庵」）。なお、十一丁裏は余白。以上、墨付は十二丁。

以上のように、本書は大正三年に鈴鹿三七の依頼で、橋本進吉が東京大学国語研究室所蔵の延徳本を影写したもので、三七がその旨の奥書を加えたものであるとわかる。また、三七は昭和三年（一九二八）に小川寿一蔵本の一見奥書を追加している。なお、行取り・仮名遣い・改丁位置などは、前述の長連恒影写本・山田孝雄影写本とまったく同じである。

なお、この橋本進吉影写本については、簗瀬の碧冲洞叢書（前述）のほかに、同じ簗瀬の『方丈記　付現代語訳』（角川文庫）や『方丈記全注釈』にも参考資料として全文が掲載されている。また、小川寿一の『延徳校本異本方丈記』と『校註異本方丈記』も橋本本を利用している。前者は小川蔵延徳本（後述）を底本とし、橋本本と藤森本（後述、石田元季影写本の穎原退蔵影写本）を対校させたものと、同書の「はしがき」に記されている。後者は長享本系統の彰考館本を底本とし、それに森本と東大本を対校し、頭注を加えたものと「はしがき」にあるのみであるが、おそらくこちらも橋本影写本によったものかと推測される。

山田孝雄影写本について

また、これまで指摘されていないが、富山市立図書館山田孝雄文庫にも東大本の影写本が存する。書誌は以下のと

おり。

富山市立図書館山田孝雄文庫所蔵（3464）。一冊。袋綴、縦二六・五、横一九・〇糎。肌色無地表紙で表紙左端に四周単辺の題簽を貼付してあるが、何も記入されていない。第一丁は扉で、左端に「異本方丈記」と墨書し、右肩に「山田孝／雄文庫」の朱印が捺されてある。本文は第二丁表第一行目より始め、墨付は十丁。一面八行に書く。書写は一筆。最後に延徳二年の奥書を記す。なお、後ろに一丁遊紙がある。書写奥書はないが、状態より見るに近代の写しで、山田の筆ではないから、山田が人に写させたものかと推測される。行取りなどが、前述の長連恒影写本、橋本進吉影写本と同じであり、東大国語研究室本の影写本と解される。

*

以上のように、東大本は震災で焼失したが、藤岡・山岸・橋本・山田の写本が確認され、また影印ではあるが『方丈記五種』収録の長連恒影写本もある。このうち、藤岡のそれは森本との校合本であるからここでは除くが、長・山田・橋本・山岸の四本は行取りがまったく同じであるから、これらが東大本の原態を伝える影写本と認められ、その点で貴重であるといえる。ただし、これらには若干の異同もあるので、左に掲出しておく。なお、山岸のそれは長の影写本を松浦、山岸と写して来たものであるから、ここでは割愛する。また、橋本影写本については、簗瀬の碧冲洞叢書の翻刻もあるから、参考にその異同も（　）内に示す。

長連恒影写本影印

1　眷顧の思ひ

2　たゆからぬには

山田孝雄影写本

眷
春顧の思ひ

たゆから（一字余白）には

橋本進吉影写本

春顧の思ひ（「叢書」では「眷」とする）

たゆからね（マヽ）には（「叢書」では「ぬ」とする）

3	病しからす	□しからす（「叢書」では「痛」とする）
4	宝蔵をひらひて	宝蔵をひらひて
5	楽みそや	楽そや（「叢書」では「み」字挿入）
6	此本奥書曰	此本奥書曰（「叢書」では「曰」字なし）

まず、1は橋本本で「春顧の思ひ」とするが、これは文意からいって「眷顧」であり、「眷」を「春」と誤記したものといえる。また、2は長本で「たゆからぬには」とある部分を、山田本は「たゆから　には」と、「ぬ」の部分が空白であり、橋本本は「たゆからねには」としているが、他の諸本では「たゆからぬには」とするところであり、前後の文脈を見ても、

をのづからなすべき事あれば、即、をのれが身をつかふ。ありくべき事あれば、みづからあゆむにたゆからぬにはあらねども、馬・鞍・牛・車と心をなやますよりはやすし。　（長本による。私に句読点や濁点等を付す）

となっており、当該箇所を含む一文は「歩かなければならないことがあれば、自ら歩いて行く。たいそうなことではないけれども、馬や鞍、牛や車はどうしようかと心を悩ますよりはたやすいことである」と解されて、文意でも「たゆからぬには」とあるのが妥当なところである。山田本が空白であり、橋本本が「たゆからねには」としているところをみると、原本の字形は「ぬ」か「ね」か判然としない形であった可能性がある。3は長・山田両本が「病しからす」となっており、橋本本が「□しからす」（□は判読不能）となっているもので、他の伝本では「痛しからず」となっていて、文意としてはそのほうが通りやすい部分である。「痛」を「病」と誤写した可能性があるが、橋本本のそれが判読不能な文字となっているから、あるいはそれが東大本の状態を忠実に写したものかもしれず、それを長・

山田が「病」と取ったものかもしれないが、ここは東大本が「病」としていたものか、影写の際に「痛」を「病」と誤写したのかは判然としない。4の「宝蔵をひらひて」は山田本のみが「宝蔵をひらいて」となっているから、これは山田本の誤写である可能性があろう。5「楽みそや」は、橋本本のみ「ミ」の字が傍記されているが、これは橋本が写し落としたのをあとで加えたものと推察される。6の「此本奥書曰」は延徳二年の奥書の冒頭にある字句で、他の延徳本諸本にも見られる部分であるが、山田本のみ「曰」の字が欠けており、これは山田本の写し落としといえよう。

こうしてみると、これらの異同の多くは影写の際の誤写・誤記の類と解され、三影写本の一致度はかなり高く、信の置けるものといえよう。

東大本については、『方丈記』の略本としてはじめて紹介された本であったという経緯があり、それ故か、震災焼失後もたびたび翻刻され、注目されてきた伝本といえるが、それらはいずれも影写本によるものであるから、右のような異同の確認、校合が必要であるといえる。

(2) 小川寿一旧蔵本（松秀庵本と略称）

小川寿一旧蔵の『方丈記』にはほかに長享本系統のものが二本ある（拙稿c、六四・六五頁参照）から、ここはそれらと区別するため、原本にあるという「松秀庵」なる旧蔵印から、いま仮に松秀庵本と呼んでおくが、現在は行方がわからない。小川の旧蔵書は一度古書店にまとまって出たことがあるという話を聞いたが、今後の出現を俟ちたい。

ところで、小川はかつて鴨長明学会を組織し、機関誌『鴨長明研究』を刊行、『方丈記』伝本の翻刻を精力的に行っていて、[6] この松秀庵本を紹介、翻刻したのも小川が最初であって、翻刻にも数種ある。

まず、龍谷大学国文学会出版叢書第五編として刊行された小川編の『延徳校本異本方丈記』の「はしがき」に、書誌の紹介がある。

小川本はその大さ縦八寸五分横六寸一分で、薄茶色の表紙には外題紙無しに、地に「異本方丈記全」（これを縮写し、本書の外題紙に使つた）とある。本文美濃紙八枚、十行であり、見返紙の下には「松秀庵」との旧蔵印がある。これが伝写の時代は徳川中期頃かと思はれる。書体及び文章は元東京帝国大学国語研究室本と非常によく類似しその相違は実に僅少である。

本書は東大本に比して脱落もあるが、その間近親関係がありさうである。東大本（十丁ノ表）に「六道四生の群生（イ類）」とあるが、本書は「六道四生の群類」となつてゐることからのみ見ると、本書は東大本の異本のやうにも解される。

これによれば、江戸中期頃の写しで、前述の東大本に近いということであるが、小川が指摘する異本注記は当該箇所のみで、それだけでは東大本が松秀庵本に対校された異本かどうかは断定がむずかしい。むしろ、両者を比較してみると東大本と松秀庵本とは、ほとんどの部分で行取りまで一致しているから、両者はかなり近い関係にあるものと推察される。なお、松秀庵本の解題は、鈴木知太郎の「方丈記諸本解説略」にも記されているが、右と大同小異なのでここでは略す。

この『延徳校本異本方丈記』は、松秀庵本の翻刻に、東大本と藤森本（後述）の異同を頭注に記したものであるが、小川には、鴨長明学会の鴨長明叢書第一輯第三編として刊行された『延徳本異本方丈記』もある。松秀庵本を影写したものを謄写版にて版行したもので、小川の解説（別冊）が付く。なお、この解説も先引のものとほとんど同じであるから省略する。

このように松秀庵本は二度も刊行されたものの、発行部数が少なかったのか、現在では所蔵する図書館も少なく、先行研究ではほとんど取り上げられていないが、戦後青木伶子氏の『広本略本方丈記総索引』に延徳本を代表するものとして松秀庵本が翻刻されている。なお、この『総索引』には青木氏の解題もあるが、それは前述鈴木の解題に多くをよったものであるからここでは省く。ただ、『総索引』は『方丈記』の諸本研究においてよく使用されているものであるから、延徳本といえばこの松秀庵本が用いられていることが多いわけである。

ところで、二〇〇〇年に刊行された『鴨長明全集』にも延徳本の翻刻が収録されていて、左のような解題が付されているが、どういう素性のものか説明がない。

方丈記（延徳本）　東京大学文学部国文学研究室蔵。配架番号、中世41.2 2. 六冊のうちの一冊で、次項の長享本と合綴。縦二七・八センチ、横一九・三センチ。茶の紙表紙、本文、楮紙、墨付八丁。扉題「異本方丈記　全」。内題「異本方丈記」。昭和五年六月十五日、後藤丹治によって影写。　（一四頁）

明らかなのは、東大の国文学研究室の所蔵であり、昭和五年（一九三〇）六月に後藤丹治が影写したものであるということだけであるが、このたび調査してみると、この後藤丹治影写本は、次に記すように、小川寿一旧蔵の長享本と延徳本（松秀庵本）を合写したものであることがわかった。

小川寿一旧蔵長享本・延徳本の後藤丹治影写本　東京大学国文学研究室蔵（中世41. 2. 2D）。一冊。袋綴、縦二六・六×横一九・一糎。渋表紙。外題なし。第一丁より第八丁は小川旧蔵の長享本、第九丁以降は小川寿一旧蔵延徳本の写しである。延徳本部分は墨付八丁。第一丁表左肩に「異本方丈記　全」と墨にて扉題を大書きにし、同丁裏中央に「東京帝国大学図書印」の大型の方形朱印がある。第二丁表第一行目に「異本方丈記」と内題を記し、次行より本文を写す。一面十行。第八丁表第九行で本文を終え、末尾に「墨そめの」の歌一首を記す。同丁裏

第一行目下部に「桑門蓮胤誌之」と書き、次行より延徳二年の奥書（省略）を写し、一行余白を隔て、「昭和五年六月十五日以小川寿一氏蔵本影写之　後藤丹治」と、書写奥書を記す。

巻末に、小川本を影写した旨の奥書があって（『全集』所収の翻刻には掲載されていない）、小川旧蔵の松秀庵本の写しである。原本が行方不明の現在にあっては、貴重なものといえる。

以上のように、小川旧蔵の松秀庵本については、翻刻が小川によるもの二種と青木氏によるものと都合三種あり、また後藤による影写本一冊と、その翻刻（『鴨長明全集』）のあることがわかる。

原本の行方がわからないから、次にそれらの異同を整理しておく。なお、検索のため、『全集』所収の翻刻には〔　〕内に、上から頁・上下段の別・行数を付した。

〈小川復刻〉「延徳本異本方丈記」	〈小川翻刻〉「延徳校本異本方丈記」	〈青木氏翻刻〉「方丈記総索引」	〈後藤本翻刻〉「鴨長明全集」	〈後藤本原本〉発表者調査
1 百人か中に	百人か中に	百人か中に	百人中に〔54・上・11〕	百人中に
2 あらそふ事	あらそふ事	あらそふ事	あらそふる〔同・下・3〕	あらそふ事
3 露にをなし	露にをなし	露にをなし	露におなし〔同・4〕	露にをなし
4 つゆよりさきに	つゆよりさきに	つゆよりさきに	つゆよりききに〔同・5〕	つゆよりききに
5 比翼の	比翼（イ目）の	比翼の	比翼（イ目）の〔同・10〕	比翼（イ目）の
6 財あらん	財あらん	財あらん	財あらん〔52・上・2〕	財あら人
7 田畠あれは	田畠あれは	田多あれは	田畠あれは〔同・12〕	田畠あれは

8	ふるにハ	ふるには[ヒ]	ふるには	ふるには〔同・18〕
9	わすかなる	わすかなる	わつかなる	わつかなる〔同・下・3〕
10	かたわらに	かたわらに	かたはらに	かたわらに〔同・5〕
11	子期がことをの	子期がことき[の]	子期がことをの	子期がことをの〔同・14〕
12	勇む時〳〵は	勇む時々は	勇む時〳〵は	勇む時〳〵は〔53・上・17〕
13	友なり	友なり	友なる	友なる〔同・下・4〕
14	しろかなり（本ノマヽ）	しるかなり（本ノマヽ）	しるかなり	しろかなり（本ママ）〔同・5〕
15	なきことを	なきことを	なきことを	なきことを〔54・上・1〕
16	冨る人に	富る人に	冨る人に	冨る人に〔同・3〕
17	冨るふるまひ	冨るふるまひ	冨るふるまひ	冨めるふるまひ〔同・9〕
18	桑門蓮胤誌之	桑門蓮胤　誌之	桑門蓮胤誌之	桑門蓮胤誌之〔同・下・1〕
19	肖柏判	肖柏判	肖柏判	肖柏判〔同・5〕

8	ふるにハ	ふるにハ
9	わすかなる	わすかなる
10	かたわらに	かたわらに
11	子期がことをの	子期がことをの
12	勇む時〳〵は	勇む時〳〵は
13	友なる	友なる
14	しろかなり（本ママ）	しろかなり（本ママ）
15	なきをを	なきをを
16	冨る人に	冨る人に
17	冨るふるまひ	冨るふるまひ
18	桑門蓮胤誌之	桑門蓮胤誌之
19	肖柏判	肖柏判

こうしてみると、小異が散見することがわかる。たとえば、1の「百人か中に」は、〈後藤本翻刻〉と筆者が後藤本を調査した〈後藤本原本〉のみが「百人中に」となっていて、助詞の「か」が抜けているから、これは後藤本の落とし と考えられる。また、8の「ふるには」は、〈小川翻刻〉のみ「は」にミセケチの「ヒ」が傍記されているが、〈小川復刻〉や小川本原本からの翻刻である〈青木氏翻刻〉、後藤本の〈翻刻〉〈原本〉ではそれが見られないので、〈小川翻刻〉の誤りであろうか。9は〈青木氏翻刻〉〈後藤本翻刻〉で「わつかなる」としているが、〈小川復刻〉〈後藤

本原本〉などで「わすかなる」となっているから、小川本の原態は「わすかなる」である可能性が高いといえよう。また、13は〈小川復刻〉〈小川翻刻〉で「友なり」としている部分で、文意から言えばそれがよいが（後掲引用部分参照）、こちらは〈青木氏翻刻〉と〈後藤本原本〉で「友なる」となっており、そちらが原態であろうか。14は、〈小川翻刻〉〈青木氏翻刻〉で「しるかなり」（本ノマ、）「しるかなり」となっているが、前後の文脈は、

心ざす道ふかければ、つれ〴〵なる愁もなし。谷の清水、峯の木だち、眼をよろこばしむる友なり。風の音、虫の声、耳ししたがふしるかなり。　（私に句読点・濁点等を付す）

となっていて、真字本系統では「随風音虫声耳指南也」となっているが、これでは訓読しづらい。長享本系統で「風の声、虫の音、耳にしたがふちから也」となっているところと勘案すれば、真字本の当該箇所は「風の音、虫の声、耳に随う指南なり」とでも読める部分で、そう読んだ場合、文意としては真字本が妥当なところである（「風の音や虫の声は耳から私を導いてくれるものである」などと解される。この部分、長享本も落ち着かない）から、松秀庵本の原態が「しるかなり」なのか、「しろかなり」なのかは、断定しにくい。

こうしてみると、中には14のように判然としないものもあって、その点については原本が行方不明の現在、判断を留保せざるを得ないが、その他多くの異同は影写ないし翻刻の際の誤写・誤記の類（あるいは印刷の際の誤植）かと考えられる。

なお、行取りについては、小川の『延徳本異本方丈記』（前述、影写したものを謄写版にて刊行したもの）と後藤の影写本が一致し、両者が原本の行取りを伝えるものと認められる。

(3) 藤森花影本（藤森本と略称）

藤森本については、前述菅野の「異本方丈記研究小史」に、

大正十二年九月一日関東大震災に際して、東京帝国大学は灰燼に帰し、その為、東大本、森本を焼失した。その時藤森花影氏蔵本（延徳本）も烏有に帰した。（中略）藤森本は、石田元季氏によつて影写せられてゐる。

（二七五頁）

と記されており、これも東大本と同じく関東大震災で焼失した由であるが、石田元季の影写本があるという（傍線部）。前述簗瀬の『延徳本方丈記』「解題」にも、

藤森本は、国語研究室本と同様に関東大震災に亡んだが、その前に石田元季氏の影写しておかれたものがあり、それが、有馬賢頼氏の「方丈記」（昭和四年刊）に収められてゐる。この原本は巻子本であつた由である。（二頁）

とあって、有馬賢頼の『方丈記』に石田の影写本が収録されているという。

はたして有馬の『方丈記』には巻末に「異本方丈記」と題した扉の裏に、次の凡例が掲げられ、以下に翻刻が収載されている。

一　石田本方丈記は、森本、東大本などゝ同じく略本系統に属し、①その巻子本の原本は、不幸にも彼の大震災の折に烏有に帰せり

一　②石田本方丈記は先生が透写し置かれしものに拠れり

一　③○印は行の切目を示し傍書の数字は現在所持せらるゝ本の頁数を示す（巻子本の一枚は此の二頁に当る）

一　四頁終より三行目の括弧内の文は、巻子本に同書体同墨色を以て傍書しありしといふ　（傍線・番号筆者）

ややわかりにくい凡例であるが、これを総合すると、「石田本方丈記は先生が透写し置かれしもの」（傍線部②）であ

り、「その巻子本の原本は、不幸にも彼の大震災の折に烏有に帰せり」（傍線部①）と解されるから、原本の名やその所蔵者は記していないが、前述菅野・簗瀬の解説を勘案すれば、この「原本」というのが藤森本である、ということになろう。

また、傍線部③によれば、翻刻の○印は、石田影写本の頁数を表し、その二頁分が原本（巻子本）の一紙にあたるとのことであり、かつ傍線部④によれば、翻刻の括弧内は墨による傍記との由で、原本に忠実な翻刻のもののごとしである。

ところで、前掲の小川『延徳校本異本方丈記』「はしがき」によると、同書は松秀庵本を底本とし、それへ東大本と石田元季本とを対校した由であり、

第三も第一（注、松秀庵本のこと）の校合に用ひた石田元季氏架蔵せらるゝ写本である。この書は前記二書とは縁遠に当るものゝ如くで、余程それらと趣を異にしており、又仮字に漢字の充てゝある所が多々ある。この書についても穎原退蔵氏の御厚意により、これが写本を以てなすことを得た。

とのことであるから、小川は石田本を直接見たのではなく、穎原退蔵の写本をもって校した由である。

この穎原退蔵の写本については、新日本古典文学大系『方丈記・徒然草』の附録に、

③略本三種（長享本・延徳本・真字本）

長享本は故若林正治氏蔵本（写本一冊）、延徳本は京都大学文学部穎原文庫蔵本（写本一冊）、真字本は武庫川女子大学蔵本（吉沢義則・野中春水氏旧蔵本、写本一冊）に、それぞれよった。（三一頁、傍線筆者）

とあって、延徳本の翻刻として、京都大学文学部の穎原文庫本なる本のそれが収録されている（傍線部）。これには解説がないから、これだけではよくわからないが、筆者が京都大学で調査したところ、同学の文学部図書館穎原文庫

に次のような略本『方丈記』の写本があった。

藤森花影本の石田元季影写本の、穎原退蔵写本　京都大学文学部文学研究科図書館穎原文庫蔵（2494／Ll・1）。写本一冊。帙入り。袋綴、二三・二×一六・五糎。無地の灰色紙表紙。表紙左肩に四周双辺の刷題簽を貼付し、そこへ「異本　方丈記」と墨書（本文同筆）。第一丁表は扉で、左肩に「異本方丈記」と墨書し、一丁裏下部に「京都／大学図／書之印」の朱印がある。二丁表も扉で、中央に「異本方丈記」と墨書。裏は余白。三丁表第一行目より本文。内題はなし。一面七行に書くが、第六丁裏のみ六行に書き、一行分を余白とする。墨付十二丁（扉を含む）。末尾は延徳二年の奥書をもって終り、書写奥書はない。

巻末に延徳二年の奥書があるから延徳本であるが、書写奥書はなく、伝来が不明である。ただ、これが穎原退蔵の文庫本であること、かつ前述新大系収録の翻刻とほぼ一致することから、これが小川の『延徳校本異本方丈記』において校本に用いられた穎原の写本であり、石田本の写しであると解される。すなわち、該本は藤森本の写しである石田影写本の写しであるということになろう。したがって、これも石田本同様本文の二頁が藤森本の一紙に相当するものと見てよい。

以上のように、藤森本についても震災で焼失しており、原本を閲覧できないが、石田元季の影写本があり、それ自体は行方がわからないが、有馬の『方丈記』にその翻刻があり、また石田本の写しである穎原退蔵影写本が京都大学に蔵されており、かつ新大系にその翻刻のあることがわかる。

そこで、東大本・松秀庵本と同様に、藤森本の翻刻と影写本との異同を掲出しておく（新大系の翻刻には掲載頁・上下段の別・行数を付記した）。

有馬『方丈記』収録の石田本翻刻	穎原文庫本 ※右注は本文同筆	新大系『方丈記』収録の穎原本翻刻
1 淀みにうかふ	淀(ミ)にうかふ	淀にうかふ〔58・上・1〕
2 去年栄えて	去年栄へて	〔同上〕〔同・6〕
3 人これに同し	人これ同し	〔同上〕〔同・7〕
4 塵となる	塵となり	〔同上〕〔同・10〕
5 むかへるときには	むかへるときは	〔同上〕〔同・下・8〕
6 はこくまむ思あり	はこくま(ま)む思あり	はこくむ思あり〔59・上・4〕
7 八億四千の思あり	八億四千の思あり	八億四千の息あり〔同・10〕
8 その念々のうちに	その思々のうちに	その息々のうちに〔同〕
9 竹のあみ戸を	竹のあみを(戸)	竹のあみを〔同・下・2〕
10 山の端をまほる	山の端をまはる	〔同上〕〔同〕
11 竹の簀子	竹の簀子	〔同上〕〔同・3〕
12 語らふ毎に	語ふ毎に	〔同上〕〔60・下・2〕
13 為に語らふ	為に語ふ	〔同上〕〔同・9〕
14 持つはかり也	持(マヽ)つはかり也 ※「(マヽ)」は原本にあり	持つはかり也〔同・14〕
15 ころもにゝたる	ころもににたる	〔同上〕〔16・下・2〕
16 桑門蓮胤誌之	桑門蓮胤　誌之	〔同上〕〔同・4〕
17 肖柏判	肖柏判	〔同上〕〔同・8〕

まず、筆者が調査・翻刻した穎原本と、新大系の翻刻とを比較すると、穎原本に散見する傍記（これは万年筆で記されてある）が、新大系では翻刻されていないことがわかる。万年筆で記されてあったから、後人の補記・校合の類と見たのであろうか。しかし、その部分を石田本の翻刻と比較してみると、その傍記を入れたかたちが石田本の本文に一致するから、穎原本に見える傍記は書写者が一旦影写したのち、あとからその写し誤りを補記したものと見るべきであろう。また、7・8は、新大系で「八億四千の息あり」「その息々のうちに」となっているが、石田本は「八億四千の思あり」「その思々のうちに」であり、これは東大本・松秀庵本も同様であり、文意としてもこちらが妥当と解され、もとのかたちはこちらかと思われる。おそらく「思」を「息」と見た誤写で、筆者が穎原本を閲覧した折は「思」と判じたが、微妙であることを断っておく。また、石田本翻刻と穎原本とを比較すると、11が穎原本で「簀子」となっているのを、石田本翻刻で「簀子」としており、ここは文意としては「簀子」とあるべきところであるが、これは石田本原本のままであるのか、それとも翻刻の誤り（あるいは誤植）であるのかは判然としない。

ともあれ、藤森本についても原本が焼失し、影写本と翻刻しか残されていないから、こうした校合が必要であることがわかる。

二、最簡略本の諸本

略本のうちでもっとも記事が少ないことからいう。すなわち、長享本独自の所謂「閻魔法皇呵責の条」（拙稿a参照）、延徳本独自の「折琴・つぎ琵琶の条」（前述）を持たない。

この最簡略本には、二系統の伝本があって、一つを真字（まな）本（真名本とも）といい、変体漢文で記してあり、もう一

つを片仮名本といって片仮名交じりである（長享本・延徳本諸本はすべて平仮名交じり）。

筆者の調査では、真字本に二本、片仮名本に二本、計四本が確認された。

（1） 真字本

ア、武庫川女子大学附属図書館蔵本（真字本と略称）

この本については、田野村千寿子（現姓郡）・加賀元子両氏の『真字本方丈記　影印・注釈・研究』に、影印と翻刻・注釈に加え、論文まで収められているから、ここでは概要と同書で指摘されていない点について触れておきたい。

この本は、古本系統の所謂保最本と合わせて一冊の形態で、江戸中期頃の保最なる人物の書写本である。もと吉沢義則の旧蔵であり、吉沢本とも呼ばれたこともあるが、その後野中春水の所蔵となり、野中から現蔵者へ寄贈されたもので、小川寿一の「方丈記書史」、鈴木知太郎の「方丈記諸本解説略」、川瀬一馬の新註国文学叢書『方丈記』（一一四頁）他に解題があり、古くから知られていたから、影印・翻刻の類は多い。整理すれば、左のとおり。

真字本（武庫川女子大蔵本）の影印・翻刻

1『真字本異本方丈記』小川寿一編、鴨長明学会・鴨長明叢書完成会刊、一九三四年十一月	影写したものを謄写印刷
2『方丈記五種』松浦貞俊校訂、古典文庫第五冊、一九四七年六月	山岸徳平影写本の影印
3『方丈記』（新註国文学叢書）川瀬一馬著、講談社、一九四八年五月	原本の翻刻
4『真字本方丈記・保最本方丈記』（碧冲洞叢書第四十二輯）簗瀬一雄編・刊、一九六四年一月	原本の翻刻

＊のちに同氏の5『方丈記　付現代語訳』角川文庫、一九六七年六月、6『方丈記全注釈』角川書店、

一九七一年八月に収録。

7『広本略本方丈記総索引』青木伶子編、武蔵野書院、一九六五年十月 ＊のちに8「武蔵野文学」第十三号、武蔵野書院（一九六六年三月）に再録	原本の翻刻。長享・延徳本と対照
9『方丈記』（日本古典全書）細野哲雄校註、朝日新聞社（一九七〇年八月）	山岸徳平影写本の翻刻
10『方丈記・徒然草』（新日本古典文学大系三九）佐竹昭弘校注、岩波書店（一九八九年一月）	原本の翻刻
11『真字本方丈記　影印・注釈・研究』田野村千寿子・加賀元子編、和泉書院、一九九四年十月	原本の影印・翻刻
12『鴨長明全集』大曽根章介・久保田淳編、貴重本刊行会（二〇〇〇年五月）	山岸影写本の後藤丹治影写本翻刻（浅見和彦氏担当）

以上のように、再録も含めると十二本を数えるが、2の『方丈記五種』収載の影印と9の日本古典全書『方丈記』収録の翻刻は山岸徳平影写本によるものであり、近年刊行の12『鴨長明全集』掲載の翻刻は山岸影写本の後藤丹治影写本によるものである。なお、山岸本はこのたびの調査で、現在実践女子大学附属図書館山岸徳平文庫に、後藤本は東京大学国文学研究室に蔵することがわかった。次に調査した書誌を記しておく。なお、後藤本は同研究室にある後藤丹治旧蔵の『方丈記』影写本類の一冊で、この真字本の影写本は同じものがほかに二本ある。いま、仮に甲本・乙本・丙本と呼んでおく。『全集』収録の翻刻は甲本によるものである。

真字本の山岸徳平影写本　実践女子大学附属図書館山岸徳平文庫蔵（3496）。一冊。袋綴。縦二七・三糎、横一九・八糎。紺色表紙。表紙左肩に、四周双辺の題簽に「方丈記別記　一村題簽（朱印「一村之印」）」と墨書（筆者未詳）。表紙右肩に、「略本　真字本（吉沢本）／広本　吉沢本／略本（吉沢本）（長享本　」と打付け書き（山岸筆）。第一丁は扉で、扉の表の左端に「方丈記」と大書きし、右下に「山岸文庫」の朱印あり。裏は余白。

第二丁表、一行目に三字下げで「方丈記　鴨長明作」と内題し、次行より本文。一面八行に書く。内容は真字本。第五丁裏二行目で本文を終え、四行ほどの余白を隔てて、末尾に「保最□（墨印の写し、未詳）」と記し、その左、綴じ目近くの余白に、

和習漢文之方丈記一巻与彰考館本同系也故又国文研究室本同焉（以上、朱筆）
昭和三年夷則二旬霖雨浪々如黴雨矣　岸廼舎識（一九二八）（七月）

翌日一校了（以上、墨書）

と記す。次いで、第六丁表、一行目に二字下げで「鴨長明方丈記」と題し、次行より本文。一面八行。朱にて校を加え、紺でイ本注記を付す。内容は保最本（古本系統）。第三十三丁裏二行目で本文を終え、二行余白を隔てて、保最本の奥書を記す（分量が多いのでここでは省略。内容は田野村・加賀両氏の『真字本方丈記　影印・注釈・研究』を参照）。第三十五丁表に、

昭和三戊辰夷則廿三令家中女子書写畢
霖雨浪々闇々雲低迷宛然如梅雨之日矣
「翌日以朱一校了」（朱）　岸廼舎識
「夷則二十九日以藍一校了
驟雨一過夕暉残樹梢寒蝉送暑気矣」（藍）
朱ハ（空白）本ナリ
・藍ハ（空白）本ナリ

と書写奥書を記し、同丁の裏に「以上二本合綴為一冊」と墨書。

次いで、第三十六丁表中央に「異本 方丈記」と大書き。裏は余白。第三十七丁表一行目に「方丈記　鴨氏長明」と題し、次行より本文。一面十二行。紙面一杯に書かず、縦二三糎、横一六糎くらいのうちに書く。これは原本の大きさのままか。朱にて句点あり。内容は長享本系統の吉沢本。第四十丁表六行目で本文を終え、以下は余白。同丁裏に長享本系統に共通する長享から慶長の奥書を記す。第四十一丁表に別筆の奥書、四十二丁表に『方丈記』の諸本系統図があり（本稿では省略す）、その奥に、

昭和竜輯戊辰参年夷則念日

微雨浪々兮　於荒井僑居識焉「翌日一校了」（朱筆）

岸廼舎

「前半書写於洛東叡山下

小野里写者也」（小字）

裏は余白で、末尾に「実践女子大／学図書館印」の朱印あり。墨付四十二丁。

真字本の山岸影写本の後藤丹治影写本（甲本）　東京大学国文学研究室蔵（中世41. 2 2A）。一冊。袋綴。縦二六・六糎、横一九・一糎。渋表紙。外題なし。見返しに「東京帝国大学図書印」（原文旧字）の大型方形朱印あり。遊紙一紙を置き、第一丁表一行目に「方丈記　鴨長明作」と題し、二行目より本文。一面八行。第五丁裏二行目にて本文を終え、四行ほどの余白を隔てて、左下に「保最□（墨印の写し、未詳）」と署名の写しあり、一行余白を置いて、

此本ハ京大教授吉沢義則先生の御所蔵なり

文学士山岸徳平君の転写本を以て影写し

終りぬ　昭和四年二月十七日　後藤丹治

と奥書あり。書写は一筆。朱筆等書き入れなし。墨付五丁。

真字本の山岸影写本の後藤丹治影写本（乙本）　東京大学国文学研究室蔵（中世41. 2 2E）。一冊。袋綴。縦二七・五、横一九・七糎。渋表紙。表紙左肩に題簽「異本方丈記　真字本」と墨書。見返しに「東京帝国大学図書印」（原文旧字）の大型方形朱印あり。遊紙一紙を置き、第一丁表一行目に「方丈記　鴨長明作」と題し、二行目より本文。一面八行。朱にて振り仮名、書き入れ等多数あり。第五丁裏二行目にて本文を終え、四行ほどの余白を隔てて、左下に「保最□（墨印の写し、未詳）」と署名の写しあり、一行余白を置いて、甲本と同じ奥書を記す。書写は一筆。墨付五丁。

真字本の山岸影写本の後藤丹治影写本（丙本）　東京大学国文学研究室蔵（中世41. 2 2E）。一冊。袋綴。縦二六・六糎、横一九・一糎。渋表紙。表紙左肩に題簽「異本方丈記　真字本」と墨書。見返しに「東京帝国大学図書印」（原文旧字）の大型方形朱印あり。遊紙一紙を置き、第一丁表一行目に「方丈記　鴨長明作」と題し、二行目より本文。一面八行。朱にて振り仮名、書き入れ等多数あり。第五丁裏二行目にて本文を終え、四行ほどの余白を隔てて、左下に「保最□（墨印の写し、未詳）」と署名の写しあり、一行余白を置いて、甲本と同じ奥書を記す。書写は一筆。なお、第六丁以下は保最本の山岸影写本の写し（昭和四年二月二十六日写、省略）。

イ、無窮会蔵本

簗瀬一雄の『方丈記全注釈』によれば、無窮会神習文庫にある「漢訳方丈記」は、前項アの武庫川女子大本の新写本である由であり（三五九頁下段）、また手崎政男氏の『方丈記論』によれば、この「漢訳方丈記」（二四二九五）は、

「狭井神社募金趣旨書」、「方壺山人留跡記」、「権田直助上書」と合綴との由である（三五三頁）。筆者は未調査である。これは今後調査しておきたい。

（2） 片仮名本

ア、小川寿一旧蔵本（小川片仮名本と略称）

こちらも前述の松秀庵本同様小川の旧蔵であったが、現在は行方が知れない。戦前、『鴨長明研究』（前述）の第五号巻末の広告（近刊書目）に「新発見　鎌倉写本異本方丈記」と出ており、小川には翻刻刊行の企画があったらしいが、頓挫したらしい。

原本を調査しての解題は、前述鈴木知太郎の「方丈記諸本解説略」に、次のように出ている。

原本は数年前紛失せしとのことにて、同氏が影写しおかれたる本によりて調査せり。半紙型の本にして墨付八枚、但し第三葉と第四葉との間に白紙一葉を存す。題簽も内題も無く、第一葉の初頭より本文に入る。漢字交り片仮名書にして、一面九行、一行約十八九字詰に書し、墨付第八葉の表の四行にて本文を終る。一行置いて次に本文と同筆にて「天保十四年」とあり、書写の時を示せるものならむ。片仮名には「ツ、ネ、ホ、マ、モ、ワ」など古体を用ゐたり。本文は吉沢博士所蔵の所謂真字本に最も多く一致し、同類のものとすべきなり。但し真字本よりかかる本の出でたるか、或はその逆なるかは遽に断定し難し。　（三三・三四頁、傍線筆者）

「天保十四年」（一八四三）の識語が巻末にあり、同年の写しかと察せられるとの由であるが、片仮名の字体は古体を示すものがあるといい、該本が真字本から出たものか、あるいはその逆であるかは断定しがたいという（傍線部）。

なお、この解説には、長享本（三条西家本、拙稿c参照）と延徳本（小川旧蔵本）との主な校異一覧があって（三

一・三二頁)、長享本・延徳本にはないが、この本にある異文として、「フルキ木ノ皮ヲシキモノトセリ」のあとに、「東北ノ角五尺斗ヲハ柴ヲリクフルトコロトセリ」の一文があり、また長享本において、

かやうに嘆つゝ一生はつくるといへとも希望はつきすつら〳〵これらをおもふに家あれは焼失のおそれあり妻子あれははくゝまんおもひあり眷属あれはこゝろにしたかはさるうらみあり　(圏点筆者)

とあるうち、圏点の部分がこの小川片仮名本にはない由である。この小川片仮名本については全文の翻刻はなく、窺い知れるのはこの鈴木の解説に挙げられている部分だけである。今後、原本の出現が俟たれる。

イ、長谷寺豊山文庫蔵本(豊山文庫本と略称)

該本は、以前から国文学研究資料館においてマイクロフィルムが公開されていたようである(N267)が、加賀元子氏が一九九六年に翻刻、紹介されている。

この本は、『憲法十七条』ほか二書と合写されており、末尾に「鴨長明方丈記終」と尾題があり、その左に、

墨染の衣に似たる心かと問人あらはいかゝこたへん
山里をうき世の外のやとそとハ住て思ひし心成けり
隠れ家ハ心の奥にありけるをしらてや深く山に入なん

と三首の和歌が記されており、冒頭の「墨染の」の歌は延徳本の巻末にも記されているもので、この本が出現するまでは延徳本の特徴の一つであったことは前述したとおりである。また、この歌の奥に、

文政三庚辰星臘月廿四日於岩泉端写得之
峯観慧光

と、文政三年（一八二〇）の書写奥書がある。内容は最簡略本に属するもので、片仮名交じりである。氏の解説で注意されるのは、前述の鈴木解説で指摘された小川片仮名本の本文とは異なる部分があり、小川本の親本には当たらないと考えられることであり、かつ前述の真字本と比較しても、これが「真字本の下流に位置する本文ではない」という点であろう。なお、その点については、この本の性格を含めて機会を得て別稿で私見を述べたいと思う。

三、まとめにかえて

こうしてみると、延徳本には東大本、松秀庵本、藤森本の三本が確認され、いずれも原本は震災で焼失か、行方不明であることがわかるが、影写本が豊富に残されており、それらを校合することで、原本の状態を窺えることがわかった。

また、最簡略本については、真字本のほかに片仮名本が二本確認されており、うち小川寿一旧蔵本は行方知らずであるが、豊山文庫本はマイクロフィルムが公開されており、翻刻もある。

こうした状況を鑑みれば、今後これらの諸本は校合されたうえで使用されることが望まれるといえる。

しかし、これまでの研究ではそうした手続きは行われてこなかった。青木伶子氏の『広本略本方丈記総索引』でも扱われているのは、長享本系・延徳本系がともに小川寿一旧蔵本、最簡略本系が真字本であって、各系統から一本ずつしか引いていない。最簡略本については豊山文庫本が発見される前のことであったからここでは措くが、『総索引』において、古本系が十一本、流布本系が六本も用いているのとは、その伝本の扱い方において、略本は大きな差が付けられている。筆者は略本を長明の草稿だと考えているわけではなく、その点については、研究者としての結論をま

だ得ていないけれども、これまでの研究は、その扱いが不当であったということはいえると思われる。

近年では、すでに指摘したとおり、田野村・加賀両氏による『真字本方丈記　影印・注釈・研究』において、略本の各系統の比較・検討が行われているわけであるが、長享本系・延徳本系の本文については前述の『総索引』に依っているから、その問題点は同じところにある。

拙稿でも指摘したところであるが、長享本系諸本についてはすでに簗瀬一雄が、『彰考館本方丈記』や『吉沢本方丈記』の解題において、「長享本の厳重な校本が待望される」と指摘しているとおりであり、略本諸本の調査、翻刻、研究等においてはこの点がいまだ課題であると思われる。

筆者は略本において、長享本八本、延徳本三本、最簡略本二本の対照本文を作成しており、そこから検討した略本諸本の関係について私見もあるが、分量が多い。どうにかして発表の機会が得られればと思っている。また、今後は流布本・古本系の諸本の調査も進めていきたいと考えている。

付記、本稿は、国文学研究資料館の共同研究「大福光寺本「方丈記」を中心とした鴨長明作品の文献学的研究」の第二回研究会（二〇一一年十一月十四日、於花園大学無聖館）での口頭発表に基づく。

本稿を成すにあたり、実践女子大学附属図書館の大井三代子氏には、山岸徳平氏と『方丈記』の影写本についてご教示を賜った。ここに記してあらためて厚く御礼申し上げる。

〔注〕

（1）『方丈記』諸本の分類は、簗瀬一雄「方丈記研究序説」（「国文学研究」第六輯、早稲田大学国文学会編、同学

出版部、一九三六年十一月。のちに、同氏『鴨長明の新研究』中文館書店、一九三八年四月や日本文学研究資料叢書『方丈記・徒然草』日本文学研究資料刊行会、有精堂、一九七一年七月・簗瀬一雄著作集二『鴨長明研究』加藤中道館、一九八〇年十月に収録）で示されたものが通説となっている。

（2）この論争については、佐々木克衛・関口忠男の「方丈記研究史（上）」（「古典遺産」第二十四号、古典遺産の会、一九七二年九月）、拙稿「『方丈記』諸本概説」（二松學舎大学文学部編『今日は一日、方丈記』新典社、二〇一三年十月刊行予定）等を参照されたい。

（3）簗瀬一雄著『方丈記　付現代語訳（角川文庫）』角川書店、一九六七年六月、一五七頁。

（4）『古筆切・拾遺（二）』冷泉家時雨亭叢書第八十四巻、財団法人冷泉家時雨亭文庫・冷泉為人編、朝日新聞社、二〇〇九年二月。

（5）『随筆紀行文集』細川家永青文庫叢刊第十二巻、財団法人永青文庫編、汲古書院、一九八四年十二月。

（6）『鴨長明研究』は鴨長明学会の雑誌。小川寿一が代表をつとめ、事務局は龍谷大学に置かれた。昭和八年（一九三三）二月に創刊され、ほぼ毎月刊行され、同十四年（一九三九）十月、第三十七号（第六巻第三号）まで続いた。

引用文献一覧

青木伶子『広本略本方丈記総索引』武蔵野書院、一九六五年十月

浅見和彦「テキストと古注釈『方丈記』」、「国文学　解釈と鑑賞」第五十九巻、至文堂、一九九四年五月

有馬賢頼『方丈記』集文堂書店、一九二九年八月

岩松東雄「異本方丈記」、「心の花」第十八巻第五号、竹柏会、一九一四年五月

大曽根章介・久保田淳編『鴨長明全集』貴重本刊行会、二〇〇〇年五月
小川寿一校『延徳校本異本方丈記』（龍谷大学国文学会出版叢書第五編）、龍谷大学国文学会刊、一九二八年十月
小川寿一編『延徳本異本方丈記』（鴨長明叢書第一輯第三編）、鴨長明学会・鴨長明叢書完成会、一九三三年十月
小川寿一「方丈記書史」、吉沢義則編『本文校異方丈記諸抄大成』立命館出版部、一九三三年六月。初出は「方丈記刊行史」、「鴨長明研究」第二・三合併号、鴨長明学会、一九三三年三月。
加賀元子「長谷寺豊山文庫蔵『方丈記』について―略本『方丈記』遡行―」、「武庫川国文」第四十七号、武庫川女子大学、一九九六年三月。のちに、翻刻部分を除き、同氏著『中世寺院における文芸生成の研究』汲古書院、二〇〇三年一月に収録
川瀬一馬『方丈記』（新註国文学叢書）講談社、一九四八年五月
草部了円『方丈記諸本の本文校訂に関する研究』初音書房、一九六六年一月
佐竹昭広・久保田淳校注『方丈記・徒然草』（新日本古典文学大系三九）岩波書店、一九八九年一月
菅野真梁「異本方丈記研究小史」、「歴史と国文学」第三巻第四号、大洋社、一九三〇年十月
鈴木知太郎「方丈記諸本解説略」、山田孝雄著『方丈記』宝文館、一九四三年六月
田野村千寿子・加賀元子『真字本方丈記 影印・注釈・研究』和泉書院、一九九四年十月
手崎政男『方丈記論』笠間書院、一九九四年二月
藤岡作太郎著『鎌倉室町時代文学史』大倉書店、一九一五年五月
細野哲雄『方丈記』（日本古典全書）朝日新聞社、一九七〇年八月
松浦貞俊『方丈記五種』（古典文庫第五冊）古典文庫刊、一九四七年六月

三角洋一「『方丈記』の古本系諸本の関係」、「国語と国文学」第一〇六二号（平成二十四年五月特集号「中世の随筆・日記」）、東京大学国語国文学会、二〇一二年五月
簗瀬一雄「方丈記伝本考」、同『鴨長明の新研究』中文館書店、一九三八年四月。のちに、簗瀬「方丈記伝本考補遺」、が『俊恵及び長明の研究』第二冊（碧冲洞叢書第三十二輯）、簗瀬一雄刊、一九六三年五月に、改訂版が同『鴨長明研究』（簗瀬一雄著作集二）加藤中道館、一九八〇年十月に収録
簗瀬一雄『彰考館本異本方丈記』（碧冲洞叢書第十二輯）著者刊、一九六一年九月
簗瀬一雄『吉沢本方丈記』（碧冲洞叢書第三十三輯）著者刊、一九六三年五月
簗瀬一雄『延徳本方丈記』（碧冲洞叢書第四十四輯）著者刊、一九六四年一月
簗瀬一雄『方丈記　付現代語訳』（角川文庫）角川書店、一九六七年六月
簗瀬一雄『方丈記全注釈』角川書店、一九七一年八月
山岸徳平「方丈記、私の書写本」、細野哲雄校注『方丈記』（日本古典全書）朝日新聞社、一九七〇年八月、附録
吉川秀雄『校定方丈記評釈』精文館書店、一九二四年九月
拙稿a「『方丈記』の諸本に関する覚書―長享本の中から―」、国文学研究資料館編『鴨長明とその時代　方丈記八〇〇年記念』（国文学研究資料館創立四十周年特別展示図録）、二〇一二年五月
拙稿b「先行研究に見る、『方丈記』の諸本とその影印・翻刻・解題一覧（稿）」、収録書は右に同じ。
拙稿c「『方丈記』諸本の再調査――長享本、その二――」、「鴨長明　研究と資料」第一輯、二松學舍大学磯水絵研究室編、二〇一二年十月